

地域から支える家庭と子どもの生活技能 教育プログラムの構想

— 親と子の「背守り」刺繍体験講座の実践から —

梶山曜子・中村誉子・魏 曉敏・竹吉昭人・正保正恵¹・村上かおり・鈴木明子
(2020年10月5日受理)

Conception of Life Skills Education Program for Children and Family Life Supported by Community
— Through the practice of "SEMORI" embroidery experience course for parents and children —

Yoko Kajiyama, Takako Nakamura, Xiaomin Wei, Akihito Takeyoshi,
Masae Shoho¹, Kaori Murakami and Akiko Suzuki

Abstract: This report is a practical report of a "SEMORI" embroidery experience program for parents and children, which was conducted envisioning a community-based family and child life skills education program. Participants in the two programs included 36 children, 30 parents, 31 high school students, and 12 university teachers and students. Most of the children who participated had positive opinions about the program, such as "I had fun" and "I want to do more." Parents also shared positive feedback, such as "It was good to be able to concentrate" and "It was nice to be able to make it with the children." As for the changes parents and children felt after participating in the first and the second program, the following answers were obtained: "I became to think strongly about my children," "I had become more active in housework," and "The number of conversations between parents and children had increased." Therefore, the life skills education program could be expected not only to help acquire skills, but also to promote communication between parents and children, and make the former feel positive about childrearing and housework.

Key words: Life skill, Regional collaboration, Parent and child, Handicraft
キーワード：生活技能，地域連携，親子，手仕事

1 はじめに

社会の急激な変化に主体的に対応し、自ら生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成することが求められている中、家庭生活に対する価値観や生活様式は多様化し、子どもたちを取り巻く環境にはさまざまな新たな問題が生じてきている。平成28年12月の中央教育審議会答申¹⁾では、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共

有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現をめざしている。学習指導要領等でも、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、枠組みを改善すること等が求められた。小学校学習指導要領²⁾における家庭科の目標には、「家族や家庭、衣食住、消費や環境等について、日常生活に必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。」とあり、生活における自立の基礎を培うために必要な資質能力として、日常生活

¹ 福山市立大学教育学部

に係る技能が示されている。

生活技能について中間(1987)³⁾は「生活技能は、あくまでも身体、主として手を通して表現する行動であり、生活実践の中での訓練を通してのみ培われるものである。」と述べており、生活実践の中での訓練を通して、行動特性として身に付いたものとして定義している。本報告では生活技能を「衣食住等の生活の自立の基礎となる日常生活に必要な基礎的・基本的技能」ととらえることとし、主に手を通して表現する行動であり、行動特性として身に付き、能力化され、主体化されなければならないものと定義する。地域で子どもたちが生活技能を身に付けることは、生活者として身近な環境と積極的にかかわり、自分と環境との関係性を問いながら日々の生活を営み、創造していくことにつながる⁴⁾。

梶山ら(2016)⁵⁾(2018)⁶⁾は母親の子育て観の違いによって、家庭科学習内容の関心度が異なり、子どもの生活技能習得に影響を及ぼすことを明らかにした。生活重視型の母親は家庭科学習内容の関心度が高く、子どもが生活技能を習得実践しているが、学業優先型や両方位型は習得実践している割合が低く、食生活技能において顕著であった。一方で、「手縫い」や「ミシン縫い」等の技能は母親の子育て観にかかわらず、習得している割合が低いが、どの母親も子どもに必要な技能としてとらえていた。しかしながら、家庭では実践させておらず、学校教育に期待していた。つまり、これらの技能は小学校家庭科5年生で初めて実践される技能となっており、学校で学習しなければ一生習得できない技能となりつつあることが推察され、学校教育以外でもこれらの技能を習得できる場が必要ではないかと考えた。

一方、鈴木(2011)⁷⁾は家庭科でのものづくり学習は児童生徒の自己効力感の向上にもつながることを明らかにしている。また、梶山ら(2015)⁸⁾は幼稚園児をもつ母親が子どものために手作り品を作ることによって、母親自身の生活の価値意識に変化を及ぼすことを明らかにしている。このことから、それらの技能に関わる体験の場を設けることによって、親の自己効力感や生活価値意識の変容を促す機会となるのではないかと推察した。また、その体験を親子で行うことによって、学校以外での子どもの技能習得の機会となるとともに親子で体験の場を共有することによる相乗効果も期待できるのではないかと考えた。

以上のことから、親の子育て観に働きかける生活技能教育プログラムの一環として、親と子の「背守り」刺繍体験講座を構想、企画し、実施した。本稿では、講座参加者へのアンケート調査結果から、本講座の成

果と課題を明らかにすることを目的とした。

2 講座の構想と企画

2-1 講座実施地域と高校生との連携について

講座実施地域である東広島市は人口約19万人の地方中都市であり、企業のベッドタウンとしての新興住宅地域と古くからの農業地域が共存している。近年、子育てしやすい市として子育て世代の移住が進んでおり、子どもの数が増加している一方で、急激な都市化によって、地域の住民のつながりが希薄化し、子育ての孤立化が懸念されている。こうした中、東広島市は東広島版ネウボラを構想し、子育て支援に力を入れようとしている⁹⁾。東広島市の子育て支援講座の支援対象は、妊娠期から小学校入学前の幼児期に対して手厚い体制となっており、小学生の子どもをもつ父親、母親等への支援はほとんどなされておらず、運営しているのは保育士や保健師等であった¹⁰⁾。小学生の親子を対象とした講座としては、親子クッキングや親子陶芸教室等は散見されたが、針と糸を使った「手仕事」講座は見当たらなかった。

本プログラムは親子で生活技能を習得しながら、親の子育て観に働きかけ、親子の生活者としての変容を意図したものであるが、それを効果的に行うために、異世代間交流の場を設けることとし、広島県立西条農業高等学校の生活科の生徒の協力を得た。東広島市にある大学と高等学校が連携して、本プログラムを運営、推進することは、親の子育て観だけでなく、次世代の親となる高校生の子育て観にも働きかけ、地域で主体的に子育てする親の育成に貢献することができると考えた。

2-2 講座で扱う教材について

川端ら(2010)¹¹⁾は、小学6年生を対象とした調査において、「手縫い」等の手指を使うことを生活に位置づけることは、手指の巧緻性の向上につながるだけでなく、知的好奇心の刺激と多方面の活動の積極性に係わる可能性を示唆している。また、梶山ら(2020)¹²⁾は、大学生を対象にした手作り品に対する意識調査において、子どもの頃に針と糸を使って作られた手作り品をもらった体験や親子での手芸・裁縫活動体験が、将来の親としての意識に影響を及ぼす可能性を示唆している。

これらのことから、針と糸を使った活動は、製作過程においても、製作物への意識のもち方においても、それぞれに意義のあるものであり、中でも「手縫い」は、自分の手を通して布や製作物に関わり、表現できる生活技能であるといえる。「手縫い」の技能を使って親

子で製作する教材として、「背守り」刺繍を取り上げた。その理由は、①「背守り」とは、子どもの健やかな成長を願って着物の背中につけた日本で古くから伝わる「お守り」であること、②伝統的な柄にはそれぞれ親の子に対する思いや願いがこめられていること、③難しい技能は必要なく、手縫いの基本である玉止め、玉結び等ができれば短時間で作品を作ることができること^{13) 14)}等の特徴があり、本講座で扱う教材として適していると考えた。

2-3 講座の概要

東広島市の市報2019年7月号、12月号に募集記事を掲載した。加えて、チラシを作成し、市内の市役所、図書館、芸術文化ホールに置いた。小学生の子どもとその保護者13組を先着順で募集した。

(1) 第1回講座の概要

- ①開催日時：2019年8月4日（日）9：00～12：00
- ②開催場所：広島大学教育学部B棟B606
- ③タイムスケジュール：

09:00～	受付
09:15～	あいさつ・紹介
09:20～	「背守り」についての話（村上千おり教授）
09:40～	伝統的な「背守り」刺繍の製作
11:30～	交流会
～12:00	アンケート・終了

(2) 第2回講座の概要

- ①開催日時：2020年1月5日（日）9：30～12：00
- ②開催場所：広島大学教育学部B棟B606
- ③タイムスケジュール：

09:30～	受付
09:35～	あいさつ・紹介
09:50～	「指ぬき」についての話（鈴木明子教授）
10:05～	我が家のオリジナル「背守り」刺繍の製作
11:30～	交流会
～12:00	アンケート・終了

3 講座の実践

(1) 第1回参加者

- ①スタッフ（20名）
大学関係5名、高校3年生13名、高校2年生2名
- ②親子（11組）

A：2年生女兒	母親
B：1年生男児	母親
C：5年生女兒	母親
D：5年生女兒	母親
E：4年生男児 2年生男児	母親
F：5年生女兒	母親
G：3年生男児	母親

- H：5年生男児 2年生女兒 年少男児 母親 父親
 - I：5年生女兒 5歳女兒 母親
 - J：4年生女兒 大学生女子 母親
 - K：3年生男児 5歳女兒 母親 父親
- 子ども17名、保護者13名（合計30名）



図1 第1回講座の様子

(2) 第2回参加者

- ①スタッフ（23名）
大学関係7名、高校3年生10名、高校2年生6名
 - ②親子（15組）
- | | | |
|---------------|-------|--------|
| A：2年生女兒 | 母親 | （2回受講） |
| B：5年生女兒 | 母親 | （2回受講） |
| C：5年生女兒 | 母親 | （2回受講） |
| D：5年生女兒 5歳女兒 | 母親 | （2回受講） |
| E：3年生男児 5歳女兒 | 母親 父親 | （2回受講） |
| F：4年生女兒 2年生女兒 | 母親 父親 | |
| G：1年生男児 | 母親 | |
| H：2年生女兒 | 母親 | |
| I：6年生女兒 | 母親 | |
| J：6年生女兒 1年生女兒 | 母親 | |
| K：2年生女兒 | 母親 | |
| L：5年生男児 | 母親 | |
| M：6年生女兒 | 母親 | |
| N：4年生女兒 | 父親 | |
| O：5歳女兒 | 母親 | |
- 子ども19名、保護者17名（合計36名）



図2 第2回講座の様子



図3 親子が製作した「背守り」刺繍作品

4 受講者へのアンケート調査

講座終了後に受講した子どもと保護者、スタッフとして参加した高校生にアンケートを実施した。回収部数は子どもアンケート34部（1回参加27部、2回参加7部）、保護者アンケート29部（1回参加23部、2回参加6部）、高校生アンケート20部であり、回収率は100%であった。それぞれの項目ごとに度数を求め、男女別学年別での平均値の差の比較は一元配置分散分析、クロス集計では χ^2 検定を行った。両講座参加の子どもおよび保護者の1回目と2回目の平均値の差の比較は t 検定を行った。集計及び解析には、統計用ソフト IBM SPSS Statistics 22を使用した。図20、図21の自由記述の分析には IBM SPSS Text Analytics for Surveys バージョン4.0.1を使用した。

4-1 子どもの結果と考察

(1) 子どもの学年と性別

受講した子どもの学年と性別は表1に示すとおりであった。男女別では男子が7名、女子が20名で女子の方が多かった。5年生が最も多く、3年生が最も少なかったが、受講した子どもの学年による大きなバラつきはなかった。

表1 講座参加者（子ども）の学年と性別

学年	女 (%)	男 (%)	計 (%)
1年生	1(5.0)	2(28.6)	3(11.1)
2年生	5(25.0)	1(14.3)	6(22.2)
3年生	0(0.0)	2(28.5)	2(7.5)
4年生	3(15.0)	1(14.3)	4(14.8)
5年生	4(20.0)	1(14.3)	5(18.5)
6年生	3(15.0)	0(0.0)	3(11.1)
他	4(20.0)	0(0.0)	4(14.8)
合計	20(100.0)	7(100.0)	27(100.0)

(2) 普段の家の仕事（お手伝い）についての考え

普段の家の仕事（お手伝い）に関する4項目について、「とても」4点から「全く」1点として4段階で問うた平均値を男女別に図4に示し、学年別に図5に示した。

お手伝いに対して男子は女子に比べて「楽しい」「面白い」と思っていた。「簡単だ」と「よくする」のは女子のほうが高かったが、どの項目においても、有意な差は認められなかった。学年別にみると、低学年や高学年は平均値が高く、中学年になると低くなる傾向がみられたが、学年による有意差はみられなかった。

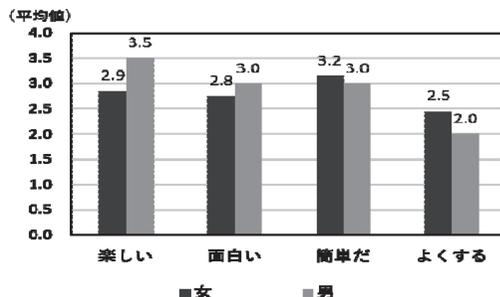


図4 お手伝いに対する考え（男女別）

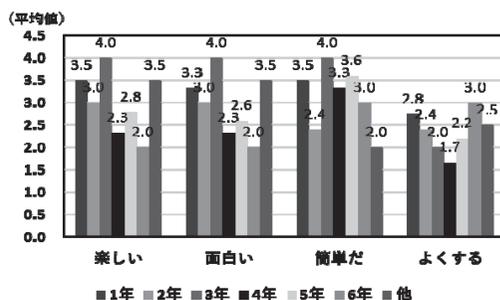


図5 お手伝いに対する考え（学年別）

(3) 普段するお手伝いの種類

普段するお手伝いの内容を自由記述で問うた結果、34項目が抽出された。それらの項目を衣・食・住生活関連に分類し、男女別に図6、学年別に図7に示した。

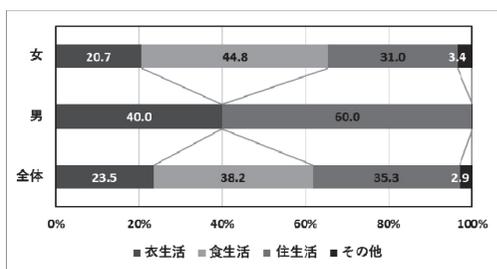


図6 普段するお手伝いの種類（男女別）

女子は「食器を片づける」「野菜を切る」等の食生活関連のお手伝いが多いのに対して、男子は食生活関連のお手伝いはなく、「洗濯物たたみ」「お風呂掃除」等の衣・住生活関連のお手伝いをしている割合が高かった。学年別では、高学年になるほど食生活関連のお手伝いが増える傾向がみえるが、有意な差は認められなかった。

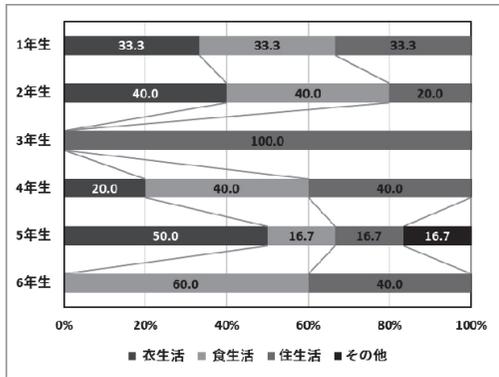


図7 普段するお手伝いの種類 (学年別)

(4) 針と糸を使った経験

針と糸を使った経験を男女別に図8、学年別に図9に示した。「よく使う」割合は女子の方が高く、「使ったことはない」割合は男子の方が高かった。学年別に見ると、「使ったことはない」割合は、学年が上がるにつれて低くなり、「よく使う」割合は学年が上がるにつれて高くなる傾向がみられた。5年生以上に「使ったことはない」人がいなかったのは、家庭科の影響があると推察される。

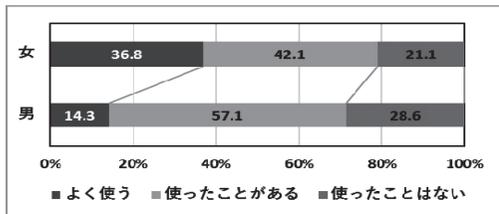


図8 針と糸を使った経験 (男女別)

針と糸を初めて使った時期は「幼稚園の時」が7人で最も多く、教えてもらった相手は「幼稚園の先生」5人が最も多かった。初めて縫ったもので多かったのが「ティッシュケース」「ポーチ」等の小物入れ(9人)で、「人形の洋服」「マスコット」等が3人いた。

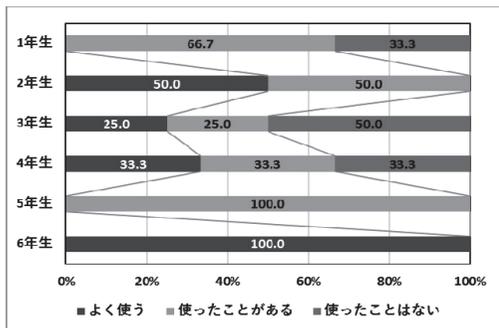


図9 針と糸を使った経験 (学年別)

(5) 裁縫への意欲 (家庭科に対する期待)

裁縫に対してとても得意と思っている割合は男子の方が高かった(図10)。男子よりも女子の方が家庭科をとても楽しみだと答えている割合が高かった。楽しみな理由としては「作るのが好きだから」「むずかしいことにトライできるから」「大人になって役立って楽しいから」等の回答があった(図11)。男子の全く楽しみでないと答えた人の理由は「何をやるのかわからないから」であった。

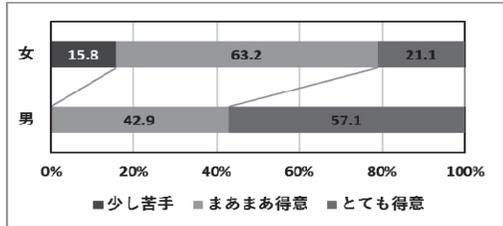


図10 裁縫は得意か (男女別)

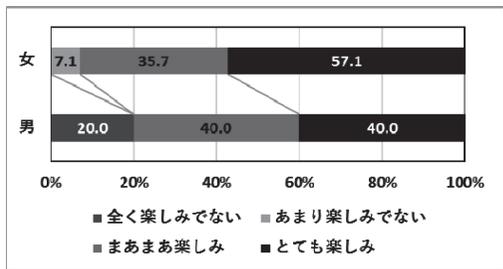


図11 家庭科は楽しみか (男女別)

(6) 講座を受講して思ったこと

この講座を受講してどう思ったのかを「とても」4点から「全く」1点までの4段階で問うた結果の男女別平均値を図12に示し、学年別平均値を図13に示した。男女で比較したところ、男子は全員「楽しかった」で最高点をつけていた。

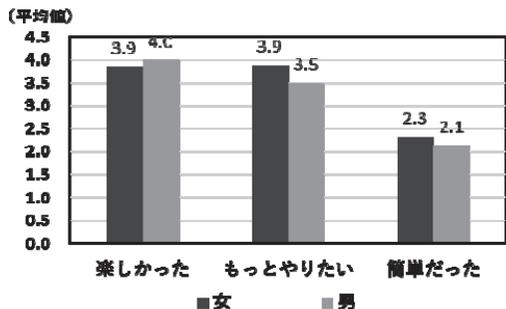


図12 講座を受講した感想 (男女別)

「もっとやりたい」「簡単だった」は女子の方が若干平均値が高かったが、男女で有意な差は認められなかった。学年別にみると、「楽しかった」と「もっとやりたい」は学年による有意差はなかったが、「簡単だった」においてのみ有意差があり、幼児や1年生2年生では若干難しさを感じていた。

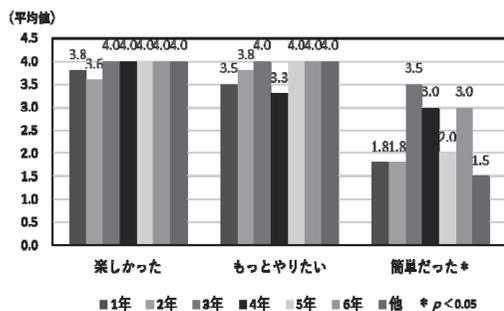


図13 講座を受講した感想 (学年別)

(7) 両講座受講の子どもの変化

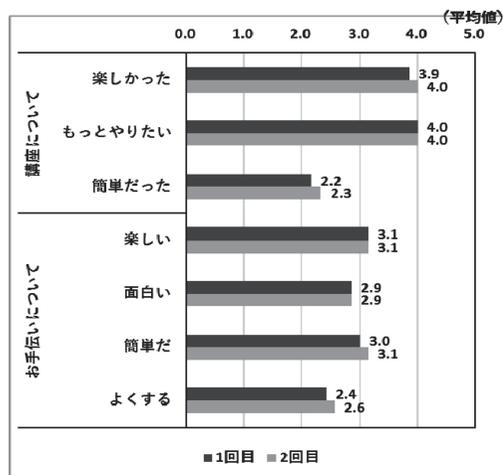


図14 1回目と2回目の比較

両講座を受講した7名の1回目と2回目の変化を図14に示した。講座については、「楽しかった」と「簡単だった」の平均値が2回目の方が高くなっていたが、有意な差は認められなかった。お手伝いについても「簡単だ」と「よくする」の平均値が1回目よりも高くなったが、有意な差は認められなかった。

4-2 保護者の結果と考察

(1) 保護者の属性

受講保護者は父親が4名、母親が19名であり、母親の参加の方が多かった。年代では、40代が最も多かった(表2)。受講保護者の職種は「パート」が30.3%

と最も多かった(表3)。

表2 保護者の年代と性別

年代	父親	母親	合計
30代	1	6	7
40代	3	11	14
不明	0	2	2
合計	4	19	23

表3 保護者の職種

職種	人数 (%)
パート	7 (30.3%)
会社員	6 (26.1%)
主婦	4 (17.4%)
公務員	3 (13.0%)
アルバイト	1 (4.4%)
自営業	1 (4.4%)
不明	1 (4.4%)
合計	23 (100.0%)

(2) 子どもとの手仕事機会と子どもに家の仕事させることへの考え

「普段家でお子さんと一緒に手仕事をを行いますか」の問いに約半数の父親、母親が「はい」と答えていた(図15)。普段する手仕事としては、簡単な料理と答えている人がほとんどで、針と糸を使った手仕事をしている人は、いなかった。普段子どもと一緒に手仕事をしていない人に理由を尋ねたところ、「ゆっくり時間がとれない」「普段の生活で精一杯」という回答がほとんどであった。

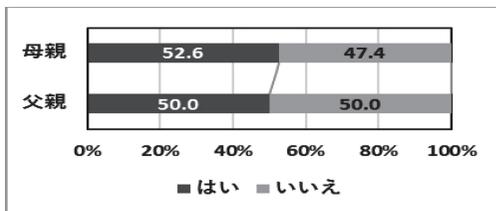


図15 普段子どもと一緒に手仕事をするか

「普段お子さんに家の仕事を手伝わせますか」の問いに対して、すべての父親、ほとんどの母親が「はい」と答えていた(図16)。普段の手伝いで最も多くさせていたのは「食器を並べる」「食器を洗う」「調理」等の食生活関連(19件)で、次いで「お風呂掃除」「ト

イレ掃除」等の住生活関連（15件）であった。衣生活関連は11件であり、「洗濯物をたたむ」「洗濯物を取り込む」等がほとんどで、針と糸を使った仕事を普段させている人はいなかった。

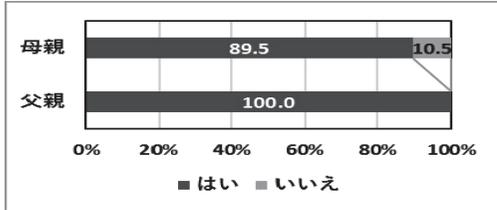


図16 普段子どもに家の仕事をさせるか

(3) 家庭科への期待

「学校で調理や裁縫等の生活技能を習得させることは大切だと思いますか」の問いに、すべての父親、ほとんどの母親が「はい」と答えていた（図17）。理由としては「自分では上手く教えられない」「親が教えると聞かないから」等、学校で先生が教えてくれることに期待する意見があった。また、「生活に必要な技能だから」「生活に欠かせない力、出来る、出来ない、知っている、知らないとでは大きく違う」等、技能習得及び実践の意義を理由としてあげている人がいた。一方で、「協調性、集中力、創造力が養えるから」「みんなと協力しあう大切さを感じてほしいから」等、技能習得以外の力を学校という集団生活の場で行う意義についても理由としてあげられていた。

「学校で調理や裁縫等の生活技能を習得させるのはいつからがよいと思いますか」の問いに対して、最も多かったのは、「5年より早いほうがよい」で父親は100%，母親は78.9%であった（図18）。理由としては、「5年より早く興味をもっていると思うから」「簡単なことからすこずつ積み重ねることが大事だと思うから」等であった。「5年がちょうどよい」と回答した理由としては「思考、技能的に高学年がちょうどよい」「包丁や針を使うのでしっかり大きくなってからのほうがよい」等であった。

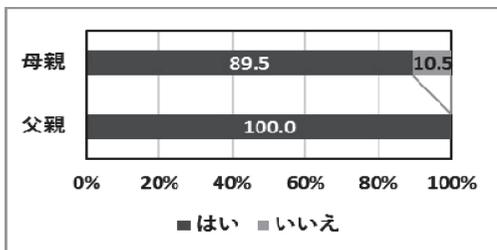


図17 学校で生活技能を習得させることは大切か

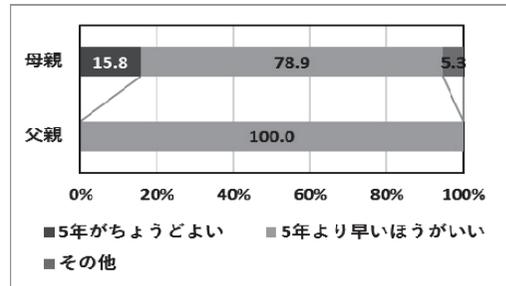


図18 学校で生活技能を習得させる時期

(4) 講座を受講して思ったこと

受講のきっかけは「子どもと一緒に体験が良かったから」が最も多く、次いで「子どもに刺繍等の仕事をさせたかったから」であった（図19）。

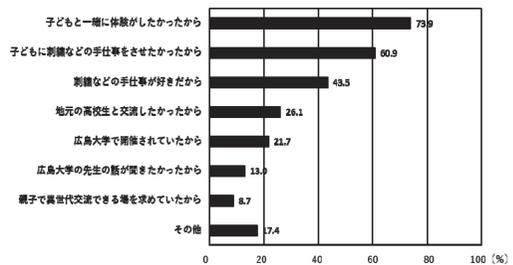


図19 受講のきっかけ

テキスト分析パッケージ（感性81_Sentiments.tap）を用いてカテゴリを生成し、カテゴリ Web として視覚化したものを図20、図21に示した。丸の大きさは回答者人数を表し、カテゴリ間の線の太さは重複している共通回答の数を表す。「子ども」「親」等の出現語数の多い具体的な記述を枠外に追記した。

100%の保護者が親子で手仕事体験ができてよかったと回答していた。「子どもの真剣な表情、完成したときの輝いた表情が見られたのがよかった」「自分も集中し、子どもも新しいことにチャレンジでき、有意義だった」等の記述があった（図20）。

異世代である高校生と交流できてよかったと回答した保護者は100%であり、「親でなく高校生に教えてもらうことで、少し緊張感もちながら楽しくできた」「普段高校生とは交流がないのでよかった」「大きくなった自分の娘の成長を想像した」「異世代交流は子どもにとっても生徒さんにとっても楽しい時間だったと思う」等の回答があった（図21）。

(5) 両講座受講の保護者の変化

第1回から第2回までの変化として保護者及び子ども共に「針と糸をもつ機会が増えた」（保護者66.7%，

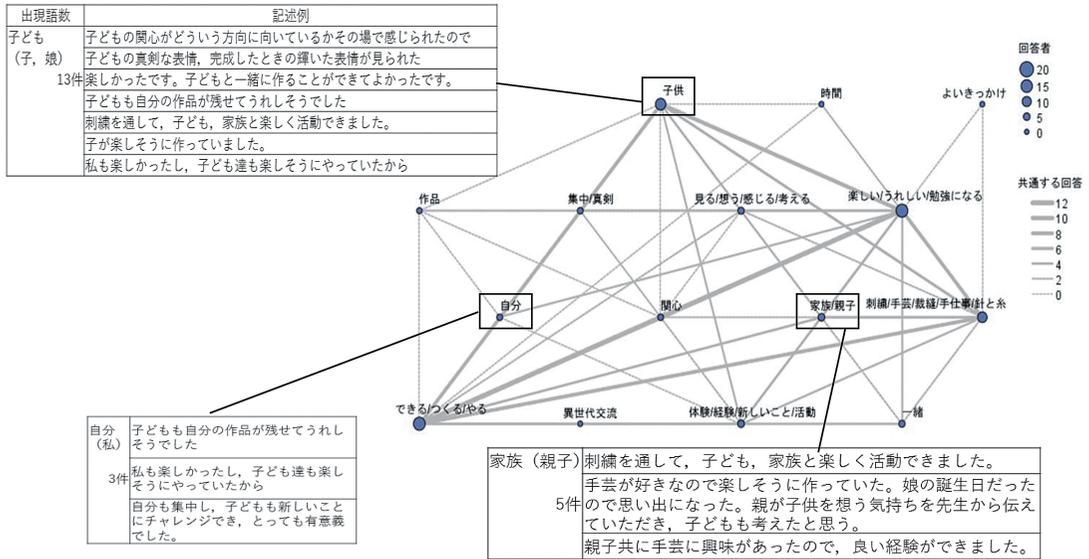


図20 「背守り」刺繍体験ができてよかった点 (自由記述)

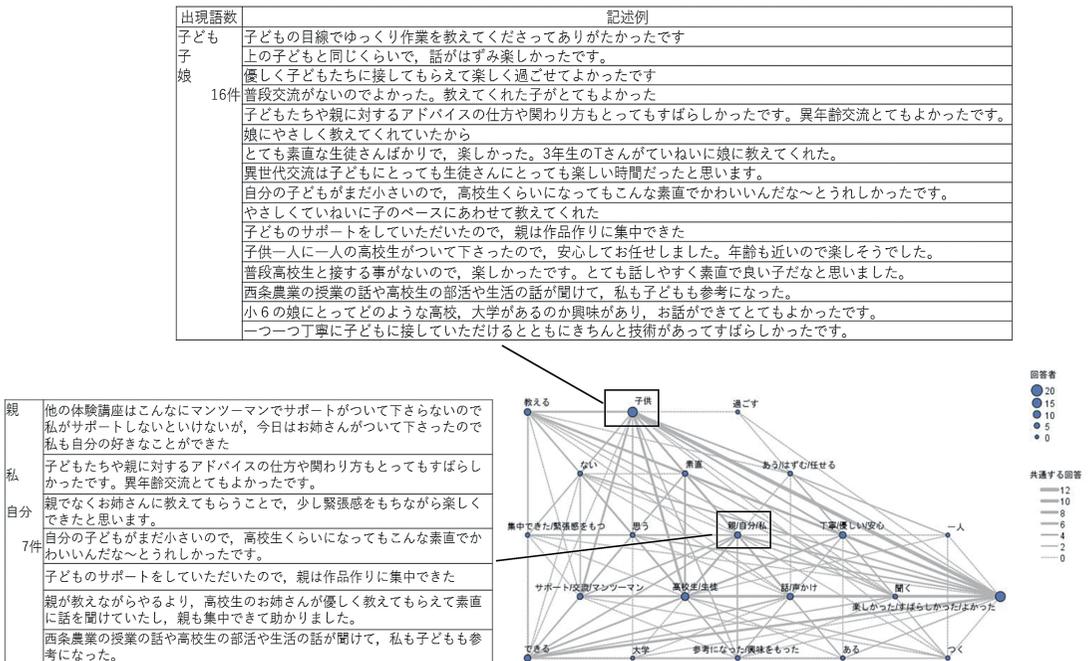


図21 高校生と交流できてよかった点 (自由記述)

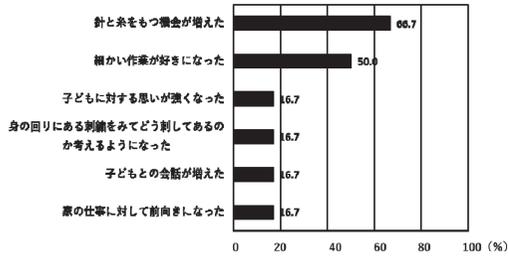


図22 1回目から2回目受講までの保護者の変化

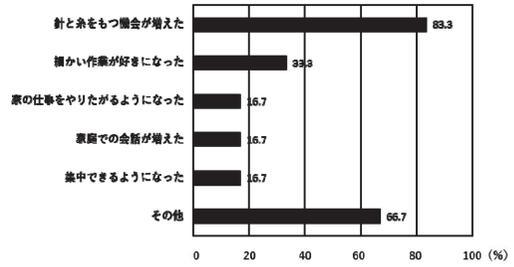


図23 1回目から2回目受講までの子どもの変化

子ども83.3%)が最も多く、次いで「細かい作業が好きになった」(保護者50.0%、子ども33.3%)であった(図22,図23)。「子ども(家庭での)との会話が増えた」「子どもへの思いが強くなった」等の親子の関係性や「家事に前向きになった」「家の仕事をやりたがるようになった」等のコミュニケーションや家事行動に関する変化もあった。

4-3 高校生の結果と考察

参加前の記述を分析した結果、「楽しく学んでもらえるようコミュニケーションを深めたい」や「親と子どもが家に帰って楽しかったと話してもらえるような日にしていきたい」等、親子と主体的に関わろうとする記述が84.6%みられた。高校生全員に今まで学習したことを生かして、親子を積極的にサポートしたいという内容の記述がみられ、地域において世代を超えた交流の機会を設けることにより、高校生の学習意欲が向上することが示唆された。

第1回と第2回の講座終了後の記述を分析した結果、高校生全員が「誰かのために縫うことでその相手のことを思いやる力が自然とつく。また作品を喜んでもらうことで縫う側の満足感がアップし意欲がわく。」等、縫う体験の意義についての記述がみられた。また、「将来親になったとき縫い物ができると素敵だなと思うようになった」「保育士になったときに生かしていきたい」等、子どもの視点だけでなく、親や保育士の視点での記述も69.2%みられた。さらに「実際に親子と触れ合うことで育児の大変さや楽しさを感じることができた。」等の記述がみられ、高校生が子育て世代や異世代との相互交流の場となる手仕事体験に関わることによって、子育て支援への理解が深まる可能性が示唆された。

5 おわりに

本稿は、地域から支える家庭と子どもの生活技能教育プログラムを構想するために実施した親と子の「背

守り」刺繍体験講座の実践報告である。2回の講座の参加者は延べ、子ども36名、保護者30名、高校生31名、大学関係12名であった。

講座を受講した子どもたちは、普段家でのお手伝いに対しては「楽しい」や「面白い」等比較的肯定的にとらえていたが、普段のお手伝いの内容は「食器の配膳」等の食生活関連や「そうじ」等の住生活関連が多かった。保護者アンケートからも同様の結果が得られ、普段子どもにさせている衣生活関連のお手伝いとしては「洗濯物たたみ」や「洗濯物取り込み」等があげられていたが、針と糸を使った裁縫等は行われていなかった。

講座を受講した子どもは「楽しかった」「もっとやりたい」等意欲的であり、保護者のほとんどが、「集中できてよかった」「子どもと一緒に作ることができてよかった」等の肯定的な意見であった。針と糸を使った活動は「手縫い」の技能習得だけでなく、集中力の発揮や完成する喜び等、精神的な成長を促す可能性があることがわかった。両講座2回とも参加した子どもと保護者に第1回受講後から第2回受講までの変化を問うた結果、子どもも保護者も「針と糸を持つ機会が増えた」や「親子で会話が増えた」「家の仕事に興味をもつようになった」等の回答を得た。保護者では「子どもへの思いが強くなった」「家事を積極的にするようになった」等の回答もあり、生活技能教育プログラムを行うことによって、技能習得だけでなく、親子のコミュニケーションを促したり、子育てや家事に前向きになれたりといった効果も期待できることが示唆された。

本講座では、地域の高校生にスタッフとして参加してもらい、異世代交流の場を設けることも目的としており、すべての保護者が異世代である高校生と交流できてよかったと回答していた。「普段高校生とは交流がないのでよかった」「大きくなった自分の娘の成長を想像した」等の意見があり、異世代交流による子育て支援の可能性も示唆された。

保護者は学校教育による生活技能の習得に期待をしている一方で、生活技能を習得させるのは5年生よりも早い方がいいと思っている割合が高かった。また、子どもが興味をもった時に習得させたいと思っている一方で、時間や余裕がないため家では習得する機会がないと思っていた。以上のことから、学校で家庭科が始まる5年生以前に地域で子どもの生活技能の習得を支えるプログラムがあることの有用性が示唆された。

このようなプログラムの効果は、短期間に見ることはできないので、継続していくことが重要であると考える。今後は、実践継続のために、地域連携の仕組みを構築していきたい。

【引用・参考文献】

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」, 2016
- 2) 文部科学省 平成29年7月小学校学習指導要領解説家庭編, 東洋館出版社, p.13, 2017
- 3) 中間美砂子『家庭科教育学原論』, 家政教育社, pp.51-52, 1987
- 4) 鈴木明子「子どもの生活実態と家庭科」, 多々納道子・福田公子編『教育実践力をつける家庭科教育法』, 大学教育出版, p.32, 2008
- 5) 梶山曜子・鈴木明子「母親の子育て観と家庭科学習内容に対する意識との関係:—小学校高学年児童の母親への質問紙調査の分析より—」日本家政学会誌 67(5) pp.266-275, 2016
- 6) 梶山曜子・鈴木明子「母親からみた父親の生活態度と児童の生活技能習得との関連」日本家政学会誌 69(11) pp.757-767, 2018
- 7) 鈴木明子「家庭科ものづくり学習への意識と自己効力感との関係:小学校6年生を対象とした調査から」日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集 54(0), p.69, 2011
- 8) 梶山曜子・下窪美咲・鈴木明子「幼稚園児をもつ母親の手芸・裁縫活動に対する意識と実態」日本家政学会誌 66(2) pp.65-72, 2015
- 9) 趙 碩・藤井 瞳・蔭 鵬・費 曉東「日本における子育て支援に関わる施策の動向と課題」学習開発学研究 (12), pp.99-105, 2019
- 10) 東広島市 HP
https://www.city.higashihiroshima.lg.jp/kosodate_kyoiku/index.html (2020年7月16日 閲覧)
- 11) 川端博子・田中美幸・鳴海多恵子「生活の自立、学力と児童の手指の巧緻性に関する研究」日本家政学会誌 61(2) pp.73-80, 2010
- 12) 梶山曜子・中村 誉子・魏 曉敏・竹吉 昭人・村上 かつお・鈴木 明子「大学生の手芸・裁縫活動の意識に及ぼす手作り品受贈経験の影響」日本家政学会誌投稿中
- 13) 下中菜穂『「背守り」練習帖 [ガジェットブックス シリーズかたち]』, エクスプランテ, 2010
- 14) 堀川波『かわいい背守り刺繍:子どもを守るおまじない』, 誠文堂新光社, 2019

【付 記】

本研究は、JSPS 科研費 JP20K02811 (代表者 梶山曜子) の助成を受けたものである。